

世 た か む い

発行・古平町史編纂室
文化会館 842-2590
第184号 平成17.1.1

年表で読む

古平の歴史

《90》

古平のホッケ漁

■明治の頃のホッケ漁

ホッケは、茨城県辺りから北の広い範囲に漁場が分布していて、現在は北海道の代表的な魚ともいえるようです。

明治以前の魚族の来遊について（大正七年の古平沿革誌、

「鯨漁以外には、サケ、マス、タラ、ホッケ、フグ、アワビ、ナマコを販売物として年々漁獲し、一定の運上金を納めさせていた。その他の魚介は単に食料にするに止まり、他に販売するようないことはなかった。また、外にどのような魚族が漁獲されていたのかは不明である」

そして、各種漁業として、

「本町は鯨漁が主産業であるため、その他の漁業における豊凶は、町にとつては経済上大きな影響は見られない。昔から本町の雑漁業（鯨漁以外の漁業）は、営業する者が自ら従事し、あるいは雇人と共に行なう比較的小規模なものがほとんどである。それで漁の豊凶は、それにかかわっている者の生活に限られるようである」

また、ホッケ漁については、「ホッケ漁は昔はもろろんのこと、明治二〇年頃までは漁獲も多かったが、次第に減退して、近頃は鯨網に乗ったものをわずかに漁獲するだけで、ホッケ漁としては行なわれていない」

とあるだけで、当時は大して重要な漁業とは考えられていなかったようです。

どのようにして販売されていたのか詳しくはわかりませんが、ホッケは鮮度が落ちやすい魚でもあり、輸送方法も限られていましたから、鮮魚として町外へ送り出すことはなかったと思われます。

『明治二〇年古平水産税負担方法』による税額に、

金三円三十四銭三厘

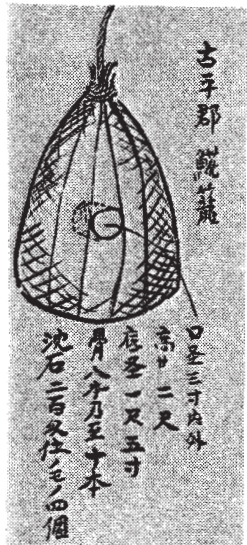
千ホッケ営業者負担高

←北海道周辺のホッケ漁場



<北のさかなたち> より

←ホッケ籠網は昔はこんな漁具を使っていた



とあるところを見ると、当時は乾物にしていたようです。

漁の方法としては明治四五年から大正二年頃まではホッケ籠網を使つて、磯舟で六隻が操業していたとあります。

それ以前の明治六年からの『古平郡諸税明細書』の中に「乾ホッケ出産高収税高明細書」というのがあり、明治初年頃の大よその漁獲高をうかがえ知ることが出来ます。

（次ページの別表）

■昭和初期のホッケ漁

古平周辺の漁場では、ホッケはニシンの終漁期に建網に乗り、処理に困る程獲れたこともあったが、ニシンと共に薄漁になりました。

ニシン漁の盛んな頃、ホッケ

の胃袋を割いて見たところ、数の子が二万粒も入っていたという調査結果があり、ホッケは数の子を食べる害魚であり、数の子荒らしの犯人として嫌われていましたが、ニシンの不漁によつて、とつて代わり浮上してきました。

ホッケは鮮度の下がるのが早く、浜では新鮮なものが手に入るのので食べられていましたが、ニシン漁の終り頃漁獲されたものは魚粕にされてしまいました。

■大衆魚の人気者

沿岸からニシンも去り、太平洋戦争になつて、動物たんぱく質の貴重な補給源として配給され、食糧難から、大量に漁獲

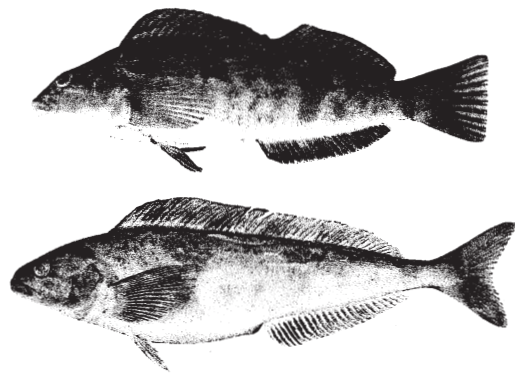
されるホッケが一躍人気の魚となりました。この頃は延縄が一般的でした。

古平町勢要覧を見ても、ホッケの漁獲高が記載されるようになったのは昭和一六年からのことです。

そして戦後、古平では巻網によるホッケの大量漁獲が行なわれるようになり、昭和一九年には四〇〇ト余りだったホッケが、昭和二一年には三倍以上の一、四〇〇トを超える漁獲がありました。

昭和二〇年代には鮮魚として出荷したほか、三枚におろして味付けをし、燻煙したものを『ホッケの身欠き』として売り出したところこれは大好評でした。また、特に秋の釣りホッ

「時期によつて色もよく似ているアブラコ(アイナメ)とホッケ



ケは鮮魚として高値を呼びました。

■変わるホッケの名前

ブリなどもそうですが、ホッケも生長と共に呼び名が変わります。

▽アオボッケⅡ体長が一〇センチ前後の稚魚の頃は、体色が青緑色である

▽ロウソクボッケⅡ一歳頃までの体長二〇センチ前後の頃はホッソリしている

▽ハルボッケⅡその後生長して、餌を求めて沿岸近くに寄ってくるもの

▽マキボッケⅡこのとき海面近くのプランクトンなどを捕食するため、大群で渦巻きをつくるようになる

▽ネボッケⅡ生長して、沖の岩礁地帯に棲むようになったもので、または地域によつてはタラバボッケともいう

▽さらに生長して、丸々と太つたものをドウラクボッケと言うそうですが、さて味の方はどうなのでしょう。

一方、魚の地方での呼び名はいろいろありますが、童謡などにも歌われる人気のメダカには、呼び名が二百数十からあると聞いて驚いたのですが、ある本には、確かめたことはありませんが、なんと呼び名が四千数百? もあると出ていました。

ホッケは、青森地方でホッチと呼ぶそうですが、それ以外の呼び名はないようです。また、魚の漢字は種類も多いのですが、ホッケにはたった一字 鰺(国字)しかありません。

(別表) 乾ホッケ出産高収税高明細書

年 度	出 産 高	収 税 高	代 金
明治 六年	九百二五五升	一石八斗五升	一二四二錢三厘
同 九 年	四四・六・八	八・九・九	一五・六六・三
同 一二年	・八・三	・一・六	・五七・〇
同 一五年	一一・六・九	二・三・三	一三・三六・〇
同 一八年	三三・六・五	六・五・三	六・五三・三

大正一二年

▼六月二一日

今日も天気快晴だ、店は今はヒマな時だ。△仲谷共同大謀から改良二〇〇丸、中アバ縄一〇〇丸、カニ縄五間、実子縄二〇〇把の注文がある。全部手持ちがあるので大威張りで売れる。赤岩大謀から四〇〇丸と合計七〇〇丸売却する。あと五〇六〇〇丸は出るだろう。本年も大いに漁が良く、これからも大謀が発展することを願う。若林主人いろいろと骨を折ってくれたが、今日四時頃帰られた。農園のリングは予想より悪い。二人でスムシ取りで忙しい。古平で、美国、積丹、古平三郡の消防講習会がある。夜、三山神社の宵宮祭で町は参詣するする人達で賑やかだ。

▼六月二二日

今日も快晴、暑さが加わり夏のような店。今は閑散期。新地の渡辺で一〇歳の女児が死んで葬式を見送る。大勢の送り人であった。まだ小学生なのに気の毒なことだ。この暑さでは扇子がほしい程であった。葬式の帰

り、三山神社の祭礼なのでお宮に参詣に立ち寄る。神社は見晴らしがよく、実に古平の一等地の名所で広々としている。四方の緑なす山の景色も一望のうちにあり、涼風が吹いて気も晴れ晴れする。三〇分程休み下山する。丸山町の阿部へアバ縄八〇〇間、ほか付属品を売る。夜になって三山神社の祭礼の余興があり、参詣かたがた見物に行く。境内は人でいっぱいだ。追分や舞

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を見る

踊でずいぶん賑やかだ。電灯も沢山ついて昼のようだ。帰り④のくん製場へ寄り一〇尾入りを二箱買って帰る。

▼六月二三日

起床七時、毎日毎日快晴続きだ。熊さんら三人でスムシ取り、私は店番だ。鯨粕暴落で当地の海産商は大打撃だ。一〇〇石三六〇〇〇三、七〇〇〇円で買い付けたものが今では三、一〇〇円、一〇〇石で五、六〇〇円の損害

は大きい。多いところでは四五、〇〇〇石、一、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇石くらいの手持ちのところは沢山あるという。商人の損害は六、一五万円、浜町で一〇万円、合計では二五、二六万円の損害になるよし、大打撃だ。午後からポツポツ雨が降り出したが、四時頃に止む。今少し降ってもよかったか。夜②に行き話をし一一時帰る。

▼六月二四日

起床七時、農園のスムシ取りも一段落する。ポツポツ袋掛けをするところもあるが、今年是一般に不作でさらに振るわぬ。一〇時頃から自転車で畑方面へ掛け取りに出かけた。田の畑に寄りしばらく話をする。サクランボは豊作だ。来月一〇日頃には早生ものが出るだろう。ススキナイの落葉松を見に行く。大きいものは一丈二尺くらいあり、七、八尺のものは沢山ある。

まだ二尺くらいのものもある。遠くからも余程見えるようになった。あと一〇年も経ったら立派な山になるだろう。その後カモイギ沢の水田を見る。造田してから三年になるが、昨年は反当り五俵もとれたとのことだ。将来は追々水田が増えることだろう。帰り田の畑を見たが袋掛けをやっている。阿部の畑に寄ったがリングは不作だ。帰ったのは一時。昼食後、二時から新地、入船町方面へ行く。金子へ寄りいろいろ話をする。浜田、田へ寄り五時帰る。

▼六月二五日

起床七時、曇り空だが雨は降らぬ。古平消防組の演習があり、火防組合員として参観する。道庁から講師も来て検閲する。各部ともポンプ操作や行進などが整然としている。仲谷部長以下皆熱心で、大いに面目を一新した。頼もしき消防組となった。昼食は役場会議室で寿司が出た。二日に注文した浜田のイワシ網、余市へ客車便で着いたとの通知があり、早速甲谷へ船積み依頼する。明日は来るだろう。向かいの電気会社では屋根を全

部トタンぶきにしたら立派になった。目下のところ、トタンが安いので、私の家でも張りこんでトタンにするかどうか思案中。坪四円とすれば、二五〇円くらいで出来る。今日から子守りを頼んだ。

▼六月二六日

起床七時、天気快晴、熊さんらは虫取りも一段落を上げたので草取りをやる。この後、袋掛けにかかる。袋は今年は一万もあれば充分だとのことだ。全く予想外の不作だ。去る二〇日、①大岡へ注文したイワシ網が着く、早かった。早速、浜田へ通知する。どうかこの網で相当の漁があれば、明年からイワシ漁は大いに発展するだろう。午後から新地方面へ行く。②藤井、権平、牟などに寄りいろいろ話をする。鯀刺網、イワシ網などの宣伝をする。帰りに③に寄る。海産商連の大打撃はどこでも大評判だ。④でも鯛鯀八〇石で四〇五〇〇円の損害の由。帰りに⑤による。夜食を馳走になり八時頃帰る。

▼六月二七日

起床七時、洗面早々農園行き。リンゴは先日よりまた一段と不

作、だんだん玉が見えぬようになった。初めの予想とは格段の差で不作だ。杉の木は一〇年程前に苗木を植えたが、今は見事になった。これくらい林があったらさぞ見事だろう。桐の木も精々手入れをすれば良いものだ。上の畑は、本年下作に貸したので実にきれいになった。一挙両得で良かった。サクランボは大豊作。農園から九時に帰り、早速、美国へ行く。長谷川、三、川岸から⑥に寄る。タラ漁の成績を聞く。一五日のナギで五万尾とれたとのこと。この分だと結構なもの、来年は手広くやるとのこと。⑦に寄り、五時頃出発して帰る。アットマイの山辺りからの海岸の見晴らしはいつ見ても良い。病氣保養地などには最適だろう。七時に帰る。浜田ではイワシ網をこしらえている。明年から流行するかも知れない。

▼六月二八日

起床七時、この頃は毎日天気続きで、農家はひと雨ほしいと言っている。このままでは作物にとって困る。先日、青森化学会社とかいうところでリンゴの袋

の注文を受けていった男、何だか山師らしいと心配していたら、今日その留め金が届いた。父も安心していた。午前中帳簿整理をしたが、店は閑散。熊さんは午後から掛け取りに出かけ、⑧藤木、吉井、⑨などから合計七〇〇円程入金があった。これで月末もしのげそうだ。曾我さん久し振りに来る。積丹方面の鯀漁況について話をする。今後貸し方は大いに警戒せねばならぬ。私も明年は鯀網の貸売りは断るつもりだ。今年の状況から恐ろしくなってきた。

▼六月二九日

起床七時、蒸し暑い。シャツ一枚でも暑い。雨を待っているが、寒暖計は七六度F（約二五度C）まで上昇する。午前中はあちこちへ掛け取りに出かける。五月中に大抵集めたので今月は割りに少ない。曾我さんが来る。鯀漁についてもいろいろ話をしたが、鯀漁の将来はまこと心細い。大阪方面へ行っていた海産商の連中が帰って来たが、鯀鮎をはじめ数の子もだんだん下落している。ことに鯀鮎は大暴落だ。三〇〇〇円以下に

なり、一〇〇石で七〇〇円余り下がり、金利その他で九〇〇円の損害だ。町内では全部で二〇万円くらいの損害になるだろうとのことだ。

▼六月三〇日

今晩三時頃から雨が降り出す。一八日余りの天気続きで農家も困っていた。今日の雨でようやく蘇生の思いがした。このところの蒸し暑い天気もこの雨でさっぱりした。雨の音を聞きつつ休んでいるのも気持ちよい。久し振りにゆつくり休む。月末で、熊さんは新開町から新地方面へ掛け取りに出かけ、二〇〇円余りを受け取る。雨は正午頃からカラリと晴れた。明日は青年団の運動会があるそうだが、この分だと上天気だろう。海産物の下落で大打撃を受け、どこへ行ってもその話でもちきりだ。

▼七月一日

昨日来の雨は今日は名残なく晴れ、上天気だ。古平在郷軍人会と青年団連合会合同の運動会があり、九時から始まる。子供等も早くから見に行く。私は午前中農園へ行く。リンゴはさっぱりだ。

帰って昼食後、悦三を連れて運動会見物に行く。思ったより人が少ない。

▼七月二日

起床七時、運動会も終わって町もさびしい。②曾我の赤子の葬式があり、妻は朝から手伝いに行く。熊さんは相変わらず農園行き。店は閑散としている。五、六日前にトミと悦三の写した写真が出来てくる、よくできた。一枝さんと佐渡の④へ送った。

▼七月三日

一日増しに夏らしくなってきた。夜になると蚊が見え、蚊帳さぞもいるようになった。店は閑散、町中では出稼ぎに出ている人が多いので至ってさびしい。一〇時頃、一天にわかには曇り雷がゴロゴロ鳴り、雨が急に降り出したが、一〇分程で晴れ上がった。農作物にとってはよい雨だった。今日一日くらいは降ってもらいたかった。午後銀行へ行き、帰途、③に寄り話をする。海産商連中の大打撃はどこへ行っても大評判だ。一日増しに暴落するので頭痛の種、まさに大恐慌だ。この頃、子供達のハシカ

が大流行している。今日から四年生以下は一週間学校が休みになる。

▼七月四日

目下、一年中で一番閑散な時だ。熊さんは農園行き、不作のリンゴの始末だ。袋掛けもやめた。12号、14号などはたまに大きいのがあるが、ほんの少しばかりだ。一〇時頃、農園へ行って見る。サクランボが少し色づく、七、八日頃には熟するだろう。シャクヤク、アヤメは満開、困老婆の命日なので、手折って来て仏前に手向けた。トミは昨日③へ遊びに行ったが、一晩泊まり今日帰る。悦三は日増しにワンパクになった。裸になって家の中を走り回っている。

▼七月五日

起床七時、今日は原田さんと火防組合費徴収に八時から出かけた。二人で一条通りを廻る。一時までに六〇余戸を廻り、四三戸から一〇九戸を集金した。夜、田清水で嫁入りがあり、招待されて行く。少し早かったので③に寄り話をして休む。九時頃行ったが、待っても待っても嫁さんが来ぬ。一時半頃になって

ようやく着いた。それから式が始まり、全く終わったのは夜の明けた四時頃だった。田と二人で帰る。よい嫁さんだった。

▼七月六日

天気快晴、昨夜から田清水の祝言に招待されたが、夜が短いのに嫁さんが一時半頃になって来たので、午前四時になってようやく帰った。すっかり夜が明けてから帰り、ひと晩眠らなかった。一〇時に起床する。一日中晴天で、農園のサクランボも熟した。夜、④で部落役員会があり、八名が集まり、祭礼の件などについて協議する。昨年の半額の八〇円程の寄付募集をすることにして、一〇時帰る。

▼七月七日

起床六時、この頃では早起きの方だ。昨夜相談した祭礼の寄付集めに、九時から④、⑤の三人連れで歩き、午前中に四八円程集金した。

▼七月八日

信用組合二階で和合会総会があり、一時から始まる。いろいろ議論が出て、結局七名が退会することになった。五時散会する。夜、②松尾の赤子が死んだとい

うので通夜に行く。

▼七月九日

九時に②の葬式を送りに行く。朝から雨が降り、一日中止まぬ。宵宮祭もこの雨ではさびしい。本年は海産物の不景気もあり、一般に祭りへの意気込みがとぼしい。

▼七月一〇日

昨夜の雨も今日は全く晴れ上がった。祭礼当日だが、町内は割りにさびしいようだ。

▼七月十一日

今日二時頃、祭礼の行列が浜中を通りになる。今年は山車が一つしか出なかった。私はカゼ気味なのでお供に出なかった。父と幸治は新地へ遊びに行く。三〇銭の小遣いをやったら喜んで行った。この時代が一番楽しいのだ。父と幸治は活動人形(?)を見たと言って、昼前に帰って来た。六時頃から雨が降り始め、九時頃から甚だしくなった。

▼七月一二日

起床八時、熊さんは曾我のふじ子さんを連れて野塚まで行った。私は店番、カレ網、ロープなど五〇余円の売り上げがあっ

た。熊さんは四時頃帰る。小樽茶屋付近まで迎えに来ていたとのことだ。曇り空だが時々小雨が降る。妻は花苗を植え付けるといつて農園行き、子供等は皆サクランボもぎに行く。サクランボも今が盛りだ。

▼七月一三日

天気快晴、悦三は浜へ遊びに行きたいと言うので、二度も連れて出る。実際、浜辺の散歩は気持ちも良く清々する。軍艦春日が小樽に入港するとのこと、一一時頃、遙か沖合いを通るのが見えた。サクランボとナシを一貫七〇銭で半などへ売る。小樽の祭礼に持つて行くとのこと。

▼七月一四日

朝から曇り空であつたが昼頃から大雨になる。平田さんから和合会の退会者への支払いを依頼されていたので支払いを済ます。午後から雨はますます強くなり、一時は戸外に出られぬ程であつた。小樽祭礼の宵宮祭だが、この雨では困るだろう。

▼七月一五日

昨日は近來まれな大雨であつた。今日は曇天だが時々小雨が

降る。子供等は学校が休みなので家中は賑やかだ。悦三は一日増しにキカナクなる。委託されていた、網荷造りして返送する。五個で約千円分ある。夜、困へ遊びに行きいろいろ話をする。

▼七月一六日

今日はこの頃にならない寒い日だ。単衣一枚では寒いので半天をはおる。午後、久し振りに新地方面へ行く。町はさびしくなつたようだ。帰途、三に寄り話をし四時頃帰る。

▼七月一七日

ようやく今日は天気も快晴になった。午前中、悦三をおんぶして農園へ行く。サクランボは終わったが、残っているのをめぐ、大根まきもそろそろ始まる。店は閑散としている時期だ。午後三時頃から火防組合の巡回で歩く、中央通りを廻る。どこの家でもハシカが大流行、一人二人と子供の休んでいない家はない程だ。六時に終わり帰る。涼しいこと、半天でもほしい程だ。

▼七月一八日

天気快晴、特段記すこともない日だ。夜、学校で上海東亜同文書院の講演会、初の支那事情に

ついでに講演会であり、学校の裁縫室は聴衆でいっぱいであつた。一一時に終わる。

▼七月一九日

起床七時、天気は快晴だが、町中はさびしいことだ。熊さんは女の出面二人と農園行き、草取り。店はひまなので、私も午後三時頃から農園へ行く。この間中の雨で作物も生長したが草もずいぶん伸びた。

▼七月二二日

土用に入つてからの天候は暑く夏らしい。学校の校門のことについていろいろ協議した。原田、梅野、合さんらと私の四人で常磐石屋へ行き、ぜびとも成功するよう催促した。

▼七月二三日

今朝六時半、共立大謀から船でアバ縄の受け取りに来る。一号板倉からアバ縄二〇〇丸を出す。三倉から改良縄二〇〇丸その他力二縄など一、五〇〇余円になる。ずいぶん今日は出た。

▼七月二四日

この頃一番の暑さだ、白地にうちわが必要になつた。三重久さん、今日、札幌の学校から夏休みで帰るとか、二時頃、暑い盛り

に奈良原先生へ餞別を持参する。三へ行くと、玉さんも居ていろいろ話をす。白玉などを馳走され六時に帰る。夜、六時頃へ遊びに行き一〇時帰る。

▼七月二五日

起床七時、昨夜はずいぶんと蒸し暑かつた。今晩三時頃から雨が降り出したが六時頃になつて晴れた。奈良原先生が今朝、富丸で出発されるので浜まで見送る。生徒なども大勢見送りに来ていた。店は相変わらず閑散だ。

▼七月二六日

今朝も朝から快晴、日中は厳しい暑さだ。一〇時頃、新地まで自転車で行き、安藤に自転車を預かつて美国へ行く。山道は太陽がカンカン照り、実に釜の中の如し。セミの声もして夏も盛りだ。一一時頃、美国に着く、赤岩大謀は準備中、二、三日中にアバ縄の受け取りに船で来るとのこと。④、⑤などに寄り、三時頃出発、三で休む。しばらく話をし五時帰る。 (続く)



成人式に寄せて

大澤文子

あれはちょうど西年の昭和二十年一月十八日の真夜。俄かのことで若い父親はあわてふためきたただだ無我夢中。

ギシギシ凍りつく堅い雪道を
まろぶようにして、母親の実家
と助産婦さんの家へ走りこんだ
という。みんなが息せききつて
駆けつけ時には可愛いいうぶ声
をあげていたあなた。

父親に似てちよつとウエーブがかつた髪だったので、三、四歳になった頃、よく通りすがりの小学生の女の子達が、「みこちゃん、その髪なあに？」と声を揃えてからかう。

あなたは細い小首をかしげて
その髪の毛の端をつまむと、
「これ？ 天然パーマ」……と
かわいい声で応えたという。

日に何度となく問われ、日に
何度となく可愛いく応えたあな

た。小学校の一年生になった時、作文の時間に、

「わたしは大きくなったらピアノの先生になります。一週間に一回教えます。お稽古がすんだら職員室にきてのんびりストーブにあたり、お茶を飲みます」と書いて、先生方の話題になったことを覚えていますか？

先生というものは、何時でも
ストープの側でのんびりお茶ば
かり飲んでいるようにみられた
のか……と。

いつかピアノの先生の志望も
うすれ、国文科を専攻する大学
生になったあなた。

「おめでとう！ 法律的にも社会人として認められ、おとなの仲間入りするようになったあなた。心より今日のよき日を祝福します」

母はあなたのやさしい『思い

やりの気持ち』と『いたわりの気持ち』を永久にもち続けてほしい：と、切に祈ります。それはあなたの祖母から母へと受けつがれた、ささやかな贈り物なのです。

人生のながい道をいま歩みは
じめたあなた。

母はそのうしろ姿に心より、「なさけある」人間になつてくれるよう、祈りの花束を贈ります。

Ⅱ Ⅰつか道新に掲載されたことのある「朝の食卓」に宇野親美先生が述べておられたが、昔の青年の愛唱した「妻をめとらば才たけて、みめうるわしくなさけある」という歌の文句の「みめうるわしく」は九〇%は先天的なもの、「才たけて」は六〇%ほどは先天的であろう。「なさけある」だけは一〇%くらいは先天的でも、九〇%はその人

のながい間の心がけ 人生体験
によつて作りあげていくもので
あらう。先天的なものだけで人
間を評価すれば、人間というも
のは不公平、不平等なものであ
る。心がけ、体験のいかんで評
価するのが一番公平というもの

であらう……と

その頃、私は幾たびか宇野先生の記事に感動したとか。

また、ドイツの詩人シラーの言葉をも思いだす。

Ⅱ時の歩みは三重である。未
 来はためらいつつ近づき、現
 在は矢のように早く飛び去り、
 過去は永久に静かに立ってい
 る……とⅡ

新年という節目にあたり、改めていろいろな事が楽しく思われる。

読むことの好きな私は何年か前に読んだことのある、柳瀬敏幸氏の随筆集の中の一文を思いだした。

「人はいく歳になつても荷物を背負つて坂道を登つていかなければならない。だが心の中に、ある目的、希望をもっているならば、荷物を背負つても明るく生きてゆける……と」

月日はめぐり、いま平成十七年一月、そろそろ白梅の便りも報じられる頃、新しき決意を胸に漲らせ、成人式にむかう若者達に、心からなる祈りの花束を贈りたい。

◇函館の開港

〜続く

箱館では外国からの文明も物と共にどんどん入ってきて、英語・ロシア語といった語彙や、新しい技術や知識などが広まり多彩な町となりました。

また、西洋型船の建造、五稜郭の築城、西洋式の農法、洋館建築、ガラス窓の家屋、ストーブ、薬用としてのコーヒーなどが伝えられたのもこの頃のことです。

◇明治維新と内乱

慶応三年（一八六七）十月の大政奉還に続いて、十二月の王政復古の号令が發布され、二七〇年近く続いた江戸幕府はここにくずれてしまいました。

翌、慶応四年（一八六八）一月の鳥羽・伏見の戦いがきっかけとなり、明治維新の内乱、戊辰戦争（ぼしんせんそう）が始まり、これが蝦夷地へと移ってきました。

この噂は蝦夷地にも伝わりましたが、大げさな評判として広がり、蝦夷地での不安と動揺は

計り知れないものがありました。

また、新しい税に対する不満から、銭函付近の漁民などを交えた六〇〇人余りが、小樽内御用所を襲撃するなどという小樽内騒動が起きたりしました。

蝦夷地の事情によりやく認識を深めた政府は協議を重ね、四月になり箱館裁判所を設置することになりました。裁判所というのは今の裁判所とは違い、政

——蝦夷地から北海道へ—— 地方自治の移り変わり

府が置いた一般行政を行なう役所です。

その総督に任命されたのが清水谷公考（しみずだにきんなん）でしたが、着任したときにはすでに制度が改正されて、裁判所は箱館府と名前が変わり、清水谷は府知事になっていました。

清水谷が旧箱館奉行から事務引継ぎを受けていた頃、戊辰戦

争の戦火は北陸・東北へと広がり始めていて、この影響で蝦夷地への米の輸送が不足し、箱館府を大いに悩ませました。

また、蝦夷地を分けて警備していた東北六藩の藩士の中には、このどさくさにまぎれて脱出し、国許へ帰ってしまう者もいました。

せっかく農民が移住して出来た開拓村からも離散者が出るとい

う状況で、混乱は各地で起きたのです。

そのようなときに、英明で、幕府の老中という要職にあった藩主の崇広は、先に謹慎を命じられていましたが間もなく病没してしまい、その後を継いだ徳広（のりひろ）は病弱で、藩内は混乱におちいつてしまいました。

松前藩ではどうしたらいいのか、

どちらに味方すべきか、小藩のことでもあり立場は微妙でしたが、若手が決起して保守派を倒し新政府を支持することを表明し、厚沢部に館城の新築に取りかかりました。

この間の慶応四年（一八六八）九月、人心を一新する意味もあり、元号が明治元年と改められ、一世一代の制度が決まったのです。

やがて松前は旧幕軍の攻撃を受ける、城下を焼き払って江差方面の館城に移りましたが、そこで戦いが起きると藩主は津軽へ脱出し、館城は攻め落とされてしまいました。

◇戊辰戦争が終わる

やがて明治二年（一八六九）五月、鳥羽・伏見の戦いから続いていた内乱も榎本軍が降伏してようやく終り、それまでの藩主が藩を返上して、多くが元の藩の藩知事に任命されました。

そして、松前藩も館藩と名前は変わったが、松前家は館藩知事ということになったのです。

戊辰戦争が始まってから、新政

府が幕府か、どちらに味方した
らよいものか中立を宣言してい
た英・米・仏・独・伊・蘭などの六
カ国が、戦争の成り行きから中
立宣言を撤廃し、新政府側に便
宜を与えたことも戦争の終結に
大きく働きました。

また、朝廷の公卿や藩主など
の名称を無くして、それらを合
せて新しく華族という制度が出
来ました。

◇開拓使の設置

時代はようやく蝦夷地に目
を向けるようになり、明治二年
七月、開拓使が設置されること
になり、使庁ははじめ民部省に
置かれることになりました。

開拓使の使というのは、古い
時代に使われた臨機で独自の
任務をもった職名で、中央政府
から離れたところに置かれる、
という意味もあります。

開拓使長官には、元佐賀藩主
であった鍋島直正（なべしまなお
まさ）が任命されましたが、その
職は外の省の長と同格とされ
るなど、蝦夷地開拓を重視して

いたことをうかがわせます。

開拓使次官には、箱館府知事
の清水谷が任命されました。

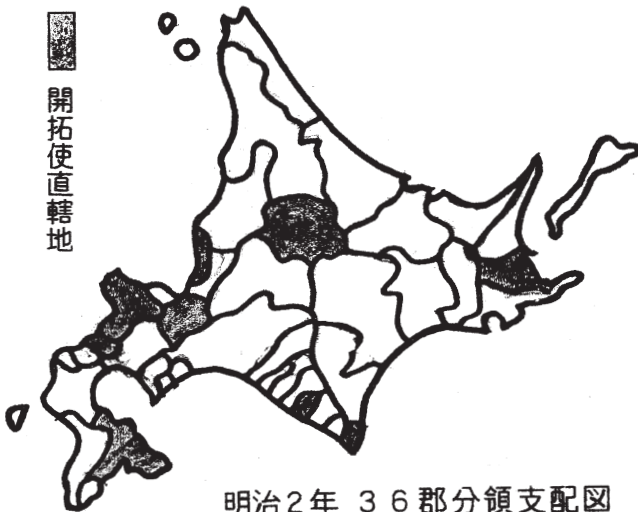
「蝦夷地ハ皇国ノ北門デアリ、
蝦夷開拓ハ皇威ニ関ワル所」と
いうのが政府の考えでしたか
ら、開拓使というのは、中央官
庁の規制にとらわれずに、国家
の独自の政策である蝦夷地開
拓を推進させるための、臨機の
地方行政の役所である、と定め
られたのです。

◇北海道と改称

そして明治二年八月一日、
これまでの蝦夷地を北海道と改
称しました。このことから北海
道では、この八月一日（旧暦）
を開道記念日としています。終
戦を体験した人には終戦記念日
と重なることにもなります。

この命名は、これまでに蝦夷地
を度々踏査し、その事情にも詳
しい松浦武四郎の原案によるも
ので、候補として

図 支配分 6 3 年 2 明治



は、「日高見道」「北
加伊道」「海北道」
「海島道」「東北道」
「千島道」などがあ
りましたが、「北加
伊道」の加伊を海に
改めて、北海道と
なったものでした。
新しい北海道は、
一カ国（後志・渡
島・石狩・胆振・日高・
天塩・十勝・釧路・根
室・北見・千島・八六
郡が画定され、開
拓使の直轄地とし

て、札幌・上川・厚田・忍路・余市・
古平・美国・積丹・古宇・岩内・寿
都・上磯・茅部・亀田・三石・幌泉
の一六郡が定められました。

これで古平は一郡となったこと
から、明治二年（一八六九）を古
平町開基の年としています。※

また、これまで「唐太」とか「柯
太」などとも書かれていた北蝦
夷地の表記を「樺太」に統一し、
明治三年樺太開拓使が設置さ
れましたが、翌年の廃藩置県の
後に樺太開拓使は廃止されまし
た。

廃藩置県が行なわれるまでは、
北海道は水戸・佐賀・仙台などの
二藩や兵部省、東京府、華族
士族、寺院などによって地域を
分け支配させていたので、実際
には開拓使の政策も限られたも
のでした。（上の地図を参照）

※ 昭和四三年（一九六八）九月
九日、町を挙げて盛大な開基百年
記念祝典が行なわれましたが、その
後、開基という表現は不適切だとい
う批判があり、以後の町村の記念行
事では開町・開村という表現に代え
るようになっていきます。



— 札幌通信 第25信 —

吉川義雄



昔というより仕方あるまい。

どう計算しても、七十年前のハナシということになる。

「ホウ、きんごさんが行くぞ。」別に珍しいことでもないが、きんごさんがいつもの姿で、いつものリズムで、ゆつくりと歩いて行く。

わざわざそれを私に知らせる
母だつて、特別な意味はないの
だが、春風が目に見えて通つて
行くような、ある種の感動が湧
くのかも知れない。

いつ見ても服装は同じだが、別に汚れたものでもない、筒つポの労働着姿で、ヘコ帯をキリリツと締め、草履を履いた足を踏みしめて、稟呼として、ゆつくりと歩いて行く。

手に何か持っているのを見たことは無いが、時々立ち止まって、片手が行方を確かめるよう

に前方を指すこともある。

およそ世間との係りなど無縁のような行脚は、丸山町界隈だけだったのだろうか。

浜町まで足を延ばしたと思われ
ないが、浜町の学童も加わっ
ていたから、町の有名人に加わ
っていたことは確かだ。

無害この上ないきんごさんが、細い目元に怒りをたたきだわせた、足を速めて、何やら口元をモグモグ震わせて通って行くのを見たことがある。

子供達が時にはバカにして、何か悪さをすることが無いでもなかったから、多分それだろうと推測する。

私は、母から「きんごさんは、余り頭が良い人だったからあゝなったんだよ。」

と、訳のわからないことを言われていたから、妙な気持ちで尊

敬もしていたので、からかったことなどは一度もなかった。

しかし、本当に尊敬する日が来た。

冬になれば、男の子はみんなタコあげをする。タコぐらいは特別器用でなくても自分で作るが、武者絵が全盛時代だったから、その絵を描くのは、よほど絵心がないと至難の技である。

ところがである。その武者絵をきんごさんが描くという。

事實、私もその描くのを見る
ことができた。尊敬していて良
よかつた、母から言われてい
たこの実証を見て、妙に安堵
したことを覚えてゐる。

色彩豊かな、きんごさんの武者絵は、売っているもの程精密には描かれてはいないが、どこか奔放で、生き生きしているのが子供達の気に入ったようだ。

子供達は争つて大きな絵をほしがっていたが、紙の大きさは常に一定していて、同じ絵柄ばかりではなく、適度に違っていることも子供達を喜ばせた。

「人の姿やかたちだけで、その

人を判じてはならんぞえ」これが祖母の口ぐせだったから、私にも、母は注意を怠ることなく戒めていたのだろう。

きんごさんが、どんな生涯を
終えられたのかはついぞ知らな
い。生まれも、育ちも全く知る
ことがないが、今に至るまで、
私の脳裏から離れることがない
のは、不思議なことだと思う。

「何のために生まれてきたのだろう。」と、戦場で幾度も考えたものだった。

春の野で、陽光を浴びながら遊ぶような、のどかな一生なんかな望んでも所詮は無謀である。

「何のために……」の答えを得られぬ人間の所業が、地球上で累々と続く。

欲望なんか、消そうと思つたところで無理な話であるが、自分の行くすべてのことが人間のためになるように、と変化させれば話は別である。

「やつと、その辺に気が付いたか」

と、どこかで、きんごさんが笑っている。

第二回 冬季演習 (続く)

よく考えもせずに伝令など引き受けたもののこの始末だ。これには参った。うっかり動き回って森林の中に迷い込んでしまったら今度こそ処置なしだと、道の真ん中に座り込んでしまった。しばらくすると、馬に乗った隊長を先頭に、大勢の兵隊がこちらに向かつて行進して来るではないか。

「やアー助かったー」
涙で目がかすんできた。近づいて来たのは何とわが連隊の、それも私が所属する第一大隊である。馬に乗っていたのは大隊長の小林貞治少佐であった。

ことの顛末を大隊長に報告し、連隊本部の位置を聞いたが、大隊長もはつきりわからないので、「わしの後について来なさい」とのこと、朝まで大隊の後について歩き回った。

老兵の綴り方

あ、樺太国境守備隊

25 橘 義 春

夜が明けて、演習が終わったところは、上敷香四二部隊の兵舎の近くであった。大隊長が、「この近くに連隊本部があるはずだから、急いで帰隊するように」と言われたので、礼をのべ

兵舎の方に向かつて歩き出した。途中で馬に乗った四二部隊の週番士官に会ったので、私の連隊本部の所在を聞いたところ、

「このまま進んだところに営門がある」
り、その中に三三部隊の連隊本部がある」と、親切に教えてくれた。やがて営門を入り、見るとあったあつた、やつと連隊本部にたどり着くことができた。

中川教官が大変心配して待っていてくれて、私が道に迷って小林大隊長のお世話になり、一晩行動を共にしたことを話したら、苦笑いをしていた。私の方に向音痴には困ったものだが、無事に演習も終わり、汽車で気屯の連隊へ戻った。

新しく部隊編成

昭和二〇年三月、中村勝美中隊長が召集解除となって帰られたが、皆からは尊敬され、剣道の達人でもあり、立派な中隊長であった。後任には大隊副官の黒田武夫中尉が任命された。

『黒田中隊長は温厚な方で、惜しくもこの年の日ソ国境での戦いで、八月一九日午前六時頃、古屯兵舎の北二キロほどの地点でソ連軍の攻撃を受け、部下一〇数名と共に壮烈な戦死をされたものとみられる』

同年三月、新たに樺太に三〇六連隊が編成され、わが連隊の各中隊からも新設の連隊へ多くの転属者が出た。私の中隊から

も六名が転属になり、同年兵の本間徳男、松谷久美もいた。

私を何くれとなく面倒をみてくれた斉藤敏美上等兵ともお別れすることになった。ラッパの先輩である松木さんも転属となった。この松木さんには大変お世話になり、お別れのご挨拶に行ったら、最後までラッパ手の先輩として私のことを心配してくれた。本当に気持ちの優しい人だった。

その外、第一大隊では四中隊が中隊長以下全員が転属になった。その後新しく四中隊が編成され、私の中隊からも一〇名程が転属した。

ラッパの教官だった中川軍曹は曹長になられて、連隊本部から四中隊へ転属になったが、私の中隊の兵舎はすぐ裏なので、会うといつも、

「元気でやってるか」と、声をかけてくれた。

そうこうしているうちに初年兵が入隊して来た。

俺もいよいよ三年兵だ、いくらか貰禄がついてきたかな……。

(続く)

連作

古平まで

13

坂本 甚 衛

地質調査の旅 (1)

戦後の大火を契機に古平を訪れた私だが、来道して余市に定住したのは開発局関係の地質調査に従事したためだった。

所属する役所の部門は札幌中之島にあり、陸の孤島古平からでは到底通えない。現在と違って快速列車もなく、交通手段も乗用車など一般に普及していなかった時代である。余市・札幌間の列車通勤は片道二時間を要し、同時刻に通っている顔ぶれは数えるほどしかいなかった。だが私の場合、全道各地の地質調査が主なので、札幌に通うのは精々一か月に一週間程度だから、さして問題はない。

一カ所の現場を終了、機材と共にコア(資材)も送付して、

帰札幌後自席で日報を元に作成、清書した柱状図と両方提出、コアの強度や剪断試験に立ち会い手伝っているうち、早くも次の試験箇所が決定、私はまた出張する事態となる。寄宿する寮があつて申し込めばいつでも泊まれるが、少々疲れても妻子の待つ余市から通いたくなるのが人情というものだろう。

さらに私に都合良かったのは、直属上司のボスが、余市からでは遠くて大変だろうから、と内緒で朝九時半まで、三十分の遅刻を認めてくれたことだ。地下鉄はまだ開通前でそろそろ工事が始まりかけ、私は駅からバスを利用しての通勤だった。呑みべえの私はたまの札幌暮らしに気が緩み、五時に勤務が退けると札幌駅地下のステーション

ンビルで生ビールを引っかけるのが恒例になっていた。

一杯が二杯になり、結局隣人と話に花が咲き終列車になった。深夜に帰宅すると尚も晩酌をやつて後、眠る仕儀となる。

翌朝は六時半の札幌行きに乗らなければならない。睡眠時間は四時間内外しかないが、若さとはよくしたもので、それでも何とか務まっていた。さすがに五、六日間続けると一キロは軽く痩せた。しかしうまくできたもので、その頃になると再び出張が始まり、肉体的な負担は解除されるといふ仕組みになっていた。

道内の、人間が居住している所ならあらゆる地域、旅館のある場所は旅館、無い所は近くの農家が民家に頼んで宿をとり、全道隈なく、どんな小さな集落や山村、漁村であれ、大概足跡を印したといつても過言ではなからう。ひとり道内だけでなく、本州各地へも転々、出張したし、遠くマレー半島からシンガポールまで出張したことある。

つた。一年の歳月がそれこそあつという間に経過した。日々、目にする事柄とて新しい事象が多いから当然といえはいえる。ちゃらんぼらんの私だが、仕事だけは意外と真面目にやっていた。と自惚れではなく思う時がある。

この地質調査なる、適度な軽い労働を加味しながらも、尚混沌とした未知の地層に対して、蓄積した幾許の知識と推測を適用し、解析力を働かせ望まなければならぬ職業が私には向いていたともいえるようか。

人生は旅だ、との言葉があるが私にとってその文句は概念ではなく現実であつた。

官費旅行に相違はないが、反面言ってみれば旅役者みたいなものでもある。あちらに一カ月、こちらに一週間と根無し草の日々である。年から年中の旅は持ち前の放浪癖に一層の拍車をかけた如くであつた。しかしその反動も何時かはくる。

ある年齢に達すると私は動くのが厭になり、すっかり

教科書のいまむかし

◇近代の学校 く 続く

新しい教育制度を実施するに当たって、遠大な教育への目的が述べられています。

その趣旨は、国民が身を立て産業を盛んに興すには、その身を修め知識を開き、特性を伸ばさなければならぬ。これは学校で行なわれることなので、今後は国民全部が学校に就学し、どここの家庭であつてもすべての者が学校に入学して教育を受け、無学者が無いようにしなければならぬ。という基本方針を明らかにしたのである。

身分や男女の差別が無く、教育は国民すべてに機会均等であるという、近代的な教育方針がこれによつてはつきりしました。

◇古平郡内の寺子屋

明治五年に学制が公布され

ましたが、古平郡内ではなお寺子屋式の教育が行なわれていました。

お坊さんや神主さん、そのほか文字に心得のある人が、暇をみて子供達を集めては読み・書き・そろばんを教えていました。新地町にあつた禅源寺の天山和尚や、漢方医であつた熊谷昌庵、浜町裏通り(現在的一条通り・国道)の東本願寺管利所の留守居役、剣道指南所の某という人達が教えていたと伝えられています。

その後、禅源寺の住職となつた中山大安和尚から、田附源吉、鎌田金蔵、花田留吉といった人達が読み・書き・そろばんを習つたと、語つていたそうです。

◇古平教育所の開設

学制が公布になつたからといって、道内でもすぐに学校が出来るといふ状況ではありま

せんでした。

古平郡の記録によると、「明治六年、浜中に教育所設立」とあります。

「古平教育所は明治六年六月、余市開墾場から堀多沖氏が来て、新地町で手習いの子供を四、五人集めて教育をしていたが、明治七年、浜中村の寺内に教育所を建て、堀多沖が助教師となる」

その後、開拓使古平出張所によつて新しい教育所設立の計画が立てられ、給料は開拓使から支給になりましたが、校舎は住民が建てなければならませんでした。

開拓事業報告には、「明治七年、官舎をもつて仮教育所とし」とあり、学校が建てられたのは明治一三年のことでした。

◇教育所の教科書

教育所では次ぎのような教科書が使われていましたが、その数から見てほとんどが教師用で、子供達はそれらを聞いて勉強していたわけです。

▽大 学 (だいがく) 孔子を祖と

出無精になつてしまつた。団体での〇〇何泊旅行とか、桜を訪ねて××への旅行などという宣伝広告の類いにも一切興味がなく、憫笑に似た苦笑いすら洩らすようになった。あんなのは旅と言えたものじゃない。

旅とはバスや列車で各地を駆けずり回る質のものでなく、少なくとも一カ所にじつくり二、三日は腰を据えてその地の人々の息吹きに触れ、交流してこそ真の旅といえる。そんな感懐を一種の哲学として、密かに胸に抱くに至つた。

いま古稀の坂を遠く越えて、古きよき日の旅路となつた昔を偲べば、茫漠としてすべては薄く霞み、そこにくぐめく私や同僚の残像も遙かな水色の記憶となり果てている。その中から思いつく儘幾らか印象に残る出来事をポツポツ拾ひ出し、次号から載せていくことにしたいと思う。

する、道徳を重んじた教えである儒学の教科書ともいえるもの、仏教でいえばさしずめお経のようなもの

▽中 庸(ちゅうよう) 〓 儒教の総合的な解説書

▽論 語(ろんご) 〓 昔から日本のことわざに「論語読みの論語知らず」とありますが、よく知られた本で、孔子の言動、政治や教育についての弟子との問答集です。日本へは千五百年程も前に渡って来ていたともいわれる。

▽孟 子(もうし) 〓 孔子の流れをくみ、性善説に基づいて仁、義、礼、智を説いた。

▽詩 経(しきよう) 〓 中国で最も古い詩集

▽書 経(しよきよう) 〓 政治や宗教にかかわる中国で最も古い經典で、模範となるような言行を集めたものである。また歴史書としても有名

▽春 秋(しゅんじゅう) 〓 紀元前七二三年から同四八一年までの、二四二年間のことを書いた歴史書

▽易 経(えききよう) 〓 素人の間

では「当たるも八卦当たらぬも八卦」と言われる、中国古代の卦(け)について述べたもので、算木を使い、陰陽をもつて天地万象を説明する

▽十八史略(じゅうはつしりやく) 〓 十八の歴史を簡単にまとめた初学者のための歴史の本で、日本でも読み物として今でも人気がある。

▽史記評林(しきひやうりん) 〓 紀元前九〇年頃にできた歴史書の解説書でいろいろあるが、これは明(ミン)一三六八(一六四四)の時代に書かれたもの。

この外にも、寺子屋時代からのものもあつたようですが、当時の教科書は全体として、中国(当時は清国)の古典といわれるものが中心であつたことがわかります。

古平教育所で教科書として使われていたその他の本には、

▽蝦夷誌 〓 諸国誌相場

▽日新真事誌 〓 經典師四書

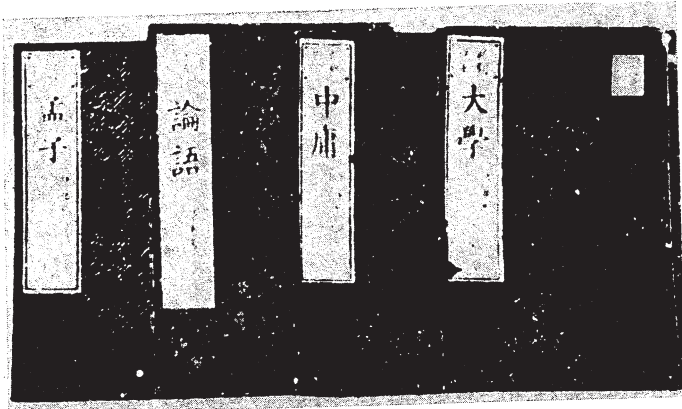
▽蝦夷年代記 〓 幼学詩全

▽詩語碑全 〓 後撰和歌集

▽西洋蔬菜栽培法

などが記録にあります。内容

四書といわれ珍重された
大学・中庸・論語・孟子



・ 日本国益 ・ 世界国益
・ 府県表 ・ 小学教授本
・ 地球初歩 ・ 女大学
・ 万延塵劫記 ・ 万国史
・ 英和辞書開拓使版 その他
これらの本は今でいえば小学生的、しかも低学年の児童に当る年代の子供達が使つたものです。当時はいったいどのようにしてこれを教えていたのでしょうか。これも興味のあるところでは。

× × ×
右の書籍を当教育所において買入れたいと思ひますが、何分僻遠の地であり輸送が困難ですので、ご用の時にでも、お手数をおかけしますが、お取り寄せ下さいますよう、一同に代わりひとえにお願い申し上げます。

明治八年三月十五日

以上
〓 開拓使
〓 古平郡御出張所
〓 惣代 幾井旧七
〓 同 森 市助
〓 戸長 宮崎彦八

一冊の教科書を求めるにも大変な苦勞があつたのです。



古平俳句会

三世代生きて悔いなし木の葉髪	斉藤波留
晴るれども初冬の空の色重し	山口悦子
窓の鷺ぬつと首出てしぐれ呑む	越野敏雄
おでん煮るも我れ一人の夕餉かな	大和田絵伊
厚き雲去りて又来る日向ぼこ	高橋重子
からからと沖に波引く秋の海	仲谷比呂古
驪人の声高々と冬の浜	室谷弘子
捨てられし大根の葉の光りをり	泉清三
艶やかに武蔵小次郎菊人形	外山俊久
冬めきて雲は重たし風白し	渡辺嘉之
船の灯を呑む海暗し冬来る	堀典子
初雪の被ひ切れざる芝生かな	本間寿昭
秋風の源こゝに年尾句碑	越野清治



古平町岬短歌会

片寄せて語るが如き友の便り会ひたき思ひに秋空仰ぐ
池田 テル

にぎやかに友らと作るトーテムポールの顔はそれぞれ画き手に似通ふ
鈴木 時子

晩秋の夕日に映えて壁に張るカレンダーの画の紅葉鮮やか
竹内 コト

温泉に一日遊びて帰りくる海に沿ふ道波しぶき散る
東 美知

暁の風に凍てつく魚市場吐く息白く漁夫らゆき交ふ
堀 典子

年離せし懐かし家は主^{あるじ}なく窓に板打つ槌音淋し
寺内 りよう

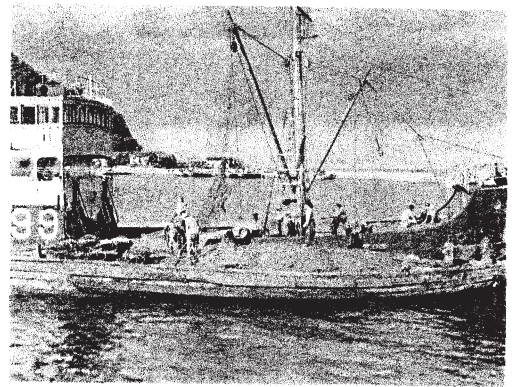
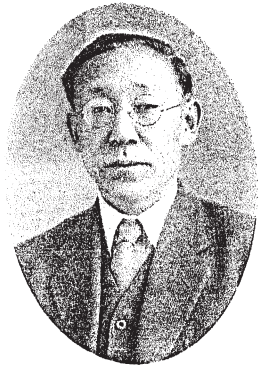


古平町史年表

昭和11年 (1936)

- ▲消防組の出初式が行なわれ、引き続いて小学校で新年宴会が行なわれる
- ▲警察署と役場が主催し、選挙粛清講演会が中央劇場で開かれる
- ▲カゼが流行し、小学校では4日間の臨時休校となる
- ▲猛吹雪のため定期船外浜丸が余市港で難破したが、死傷者はなかった
- ▲前浜で波にさらわれた的場某の死体が、沖村海岸に漂着する
- ▲不在中であった町長に一戸孝が就任する
- ▲町会議員らが琴平神社で選挙粛清祈願祭を行う
- ▲古平信用組合が伊勢参宮預金の取扱いを始める
- ▲りんご栽培の講習会が開かれ、チョペタンの石井りんご園で剪定(せんてい)の実技指導が行われる
- ▲古平を出港したさつき丸が余市港で時化のため破損したが、乗組員は全員無事であった
- ▲余市汽船株式会社が設立され、小原・甲谷両回漕店を吸収合併して、定期船に金華丸が就航する
- ▲古平信用利用組合が貯蓄奨励のため、新入学児童に貯金通帳を贈る
- ▲凶害対策町民大会(発起人・町議横山隆起)を開き、決議文を宣言する
- ▲火災予防デーに消防車ほか2台の自動車が町内を廻り、ピラヤ神社の鎮火札を配布する
- ▲稲倉石鉱山の落盤事故で、大久保某(18歳)が死亡する
- ▲支庁から係員が来て畜産講話(馬・羊・兎・鶏の飼育について)と、座談会が小学校で開かれる
- ▲古平尋常高等小学校保護者会役員会で町営グラウンド建設について協議し、旧競馬場跡を適地とした
- ▲営林区署長の林業講話が小学校で開かれる
- ▲元八木の浜から60間にわたって石垣工事が、道庁直営事業として行なわれる
- ▲火防組合全道大会が札幌市公会堂で開かれ、古平火防組合からも出席する
- ▲札幌北光小学校児童60余人が9日間の海水浴に来町し、沢江村○松尾漁場の番屋に宿泊する

⇒ 町長不在九カ月就任した
第八代町長 一戸 孝



↑ 鉱石の輸送がかます(吠)から、はしけ(舢舨)によるばら積み輸送に代わる



↑ 第一回伊勢神宮参拝の記念写真
(伊勢神宮境内で撮影)